

Singapore Botanic Gardens

1. 概要と世界遺産登録の背景

シンガポール植物園は、1859 年に設立された熱帯植物園であり、シンガポールで初の、そして唯一のユネスコ世界文化遺産である。2015 年に登録された。

2. 世界遺産に登録された理由

この植物園は、大英帝国が持っていた植物学の知識や技術を東南アジアに持ち込み、地域の環境に適応させ、広めるための重要な交流の場であった。

特に、ブラジル原産のパラゴムノキの種子をイギリスから受け入れ、ここで研究・育成し、大英帝国の植民地であったマラヤやボルネオなどの東南アジア全域の大規模プランテーションに普及させる上で中心的な役割を果たした。

この成功は、世界的なゴム産業の発展を支え、東南アジアの経済構造を大きく変えた。この植物園は、単なる植物の展示場だけでなく、農学・経済、作物の研究所として機能していたことこそが、世界遺産登録に至った価値である。

ゴム以外にも、スパイス、パーム油など、さまざまな経済作物がこの地で研究され、地域全体での栽培拡大に貢献した。

もう一つの理由は人類の歴史上重要な時代を残す優れた景観である点。シンガポール植物園は、19 世紀半ばから 20 世紀初頭にかけてのイギリス植民地時代の熱帯植物園の優れた文化的景観を今に伝えている。敷地の設計は、科学的な研究の場としての機能性と、都市のレクリエーション空間としての美しさを両立させている。植民地時代の歴史的な建築物、デザインされた湖、広大な芝生、そして計画的な植栽が一体となり、熱帯における植物研究と植民地統治の歴史を物語る独特の景観を形成している。

また、過去の遺産であるだけでなく、現在も植物学の研究、種子の保全、教育の拠点として機能しており、特にラン科植物の研究と育種においては、国際的に高い評価を受けている。

3. まとめ

シンガポール植物園が世界遺産となった最大の特徴は、「大英帝国の科学知識が熱帯アジアの環境と結びつき、ゴムをはじめとする経済作物の普及を通じて世界の産業と地域の経済に決定的な影響を与えた、科学技術と文化の交流を示す優れた文化的景観」であること。

●実際に公園を訪れて

公園には植物の他にベンガルオオカゲやジャワハッカ、ハトのような動物もたくさんいた。国立洋ラン園(ナショナル・オーキッド・ガーデン)には時間がなく、訪れることができなかったのが、少し残念である。しかし、ランニングや散歩の場として人々に親しまれていることがわかった。

